

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	慶應義塾大学	拠点番号	D15
申請分野	人文学		
拠点のプログラム名称 (英訳名)	心の解明に向けての統合的方法論構築 (Toward an Integrated Methodology for the Study of the Mind)		
研究分野及びキーワード	〈研究分野: 哲学〉(認知哲学)(思考)(言語)(比較思想史)(生命倫理)		
専攻等名	文学研究科哲学・倫理学専攻、文学研究科美学美術史学専攻、文学研究科史学専攻、文学研究科国文学専攻、文学研究科中国文学専攻、文学研究科英米文学専攻、文学研究科独文学専攻、文学研究科仏文学専攻、文学研究科図書館・情報学専攻、社会学研究科心理学専攻、社会学研究科教育学専攻、言語文化研究所		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 西村 太良 教授 他 19名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書（平成16年1月現在）を抜粋

<p><本拠点がカバーする学問分野について></p>	<p>「心の解明」に伝統的に関わる哲学・倫理学分野を中核として、1)言語・論理の領域では論理哲学、言語哲学、2)発達・進化の領域では認知神経科学、行動遺伝学、3)心性・精神の領域では比較心性史、対照言語学、4)情報・メディアの領域では情報メディア論、行動分析学、5)表象の領域ではデジタル表象学、芸術学をカバーしているが、主眼はむしろそれらの学問分野を横断する新しい研究領域を創生することにある。</p>
<p><本拠点の特色及びその目的等></p>	<p>心の問題の解明に向けて、心のハードな側面、即ち脳の機能、構造およびその進化についての脳科学、神経科学、遺伝子生物学的方法による最新の研究成果を、心のソフト的側面についての従来の人文諸学の方法論による研究の蓄積の上に位置づけ、その全体的なコンテキストを明らかにすると共にそれらの成果に対応できる統合的方法論を構築し、更に将来的には文系、理系の各学問分野を有機的に統合、融合した新しい研究教育組織を全学的な支援の下に形成することを目的とする。</p>
<p><COEを目指すユニーク性></p>	<p>近年、脳科学、神経科学などの扱ういわゆる「狭義の心」についての理系研究組織は国内外で数多く活動しているが、伝統的な人文学の研究対象である「広義の心」をも包含し、なおかつ心の問題全体を統合的方法論によって解明しようとする研究組織は国際的にもまだ未開発の状態にある。その意味で本拠点は心の統合的解明のためのユニークな研究拠点として世界を先導することを目指している。</p>
<p><本拠点のCOEとしての重要性・発展性></p>	<p>論理、言語、表象、感情など従来、人文科学的方法論によって研究が蓄積されてきた心の領域について、光トポグラフィーや脳波計、アイカメラなどを用いて測定可能なデータによる検証を行うことは、心を解明していく上において極めて重要な意味を持つが、同時に表象認識、論理推論形成におけるヒトと動物、あるいは成人と幼児の比較対照実験などで得られる新しい知見を接点とする様々な学問分野間の共同研究こそが今後の統合的方法論構築へと発展していくと期待される。</p>
<p><本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果></p>	<p>今日、心の問題を十全的に解明するためには本来は人文学の範囲だけでは不十分であり、次の段階として医学、理工学などの分野の研究者を加えて、真の意味での理系、文系を融合した研究拠点到発展させ、光トポグラフィーに加えてfMRIも援用した実験、さらには情報科学的研究まで視野に入れた研究教育体制を形成したい。この段階で改めて哲学・倫理的な方法論との統合が最重要課題として浮かび上がってくるはずである。</p>
<p><背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等></p>	<p>近年、脳と心の研究は質、量ともに爆発的に拡大しつつあるが、当研究拠点との関連では、脳機能画像技術の進歩に伴い、従来研究対象となりえなかった領域、たとえば新生児の言語認知も取り扱えるようになり、言語学、実験心理学、脳科学の共同研究の成果が期待される。また推論分野の国際学界では非言語的推論の分析へ向かって論理学の成果が拡張されているが、本拠点でも比較認知科学との共同研究によりその先導役を務めることとなる。表象、メディア分野でも図像、テキストを含むデジタルコンテンツ加工技術および視覚測定技術の進歩により、人間の心性との双方向的なインターアクションのより精密な解明が実現される。</p>

機 関 名	慶應義塾大学	拠点番号	D 1 5
拠点のプログラム名称	心の解明に向けての統合的方法論構築		

◇ 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、下記のコメントに留意し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

研究目標が壮大なだけに、各個別領域が総花的に展開されるだけにとどまらないよう、今後も引き続き留意してほしい。光トポグラフィーを駆使した発達・進化班の成果、線形論理を中心とした論理・言語班のいくつかの見通しなどは評価できるが、一方で心の解明の統合的方法論にはまだ遠いという懸念もある。哲学・倫理学の弱さ、言語部門が言語哲学や普遍文法に限られ多様性の取り込みが足りない点など、適切な補いをつけて心性史、表象班等にリンクするよう心がけてほしい。若手研究者育成にも一層の成果が望まれる。